

自民の若手議員による「戦争肯定＝戦争反対批判」発言を聞いて

自民の若手議員による「戦争肯定＝戦争反対批判」発言が物議を醸している。

これを聞いて思い出したのは40数年前のこと。当時、日本は出撃基地等をアメリカに提供することでベトナム戦争に加担していた（何のことはない、自衛隊が派遣されていないだけで、そのとき事実上の集団的自衛権は発動されていた）。それに反対する若者の運動が展開されていた。そんなとき、父の友人が我が家を訪問した。父との会話を何気なく聴いていたら、その方は「(ベトナム戦争反対の) デモするような甘ったれた学生は皆機関銃で撃ってしまったらよい」といった。それを聞いたとっさの私の感想は「そこまで言うか?!」だったが、その方を批判する気にはならず、さほど怒りも湧かず、むしろ、そういうことをいう気持ちが理解できるほどだった。なぜ、そうなるのか、ということは何日か考えた。その結果は次のようなものだった。

くだんの発言をした方は、発言当時、40数歳。父と同様、もう少し先の大戦が続いていれば戦場に送られていた年代。つまり、戦争で死ぬことも覚悟した年代だ。その方は、若者の反戦デモを見て、次の2つの思いを持ったのだ。

一つ、「自分たちは若い時、死ぬことを覚悟させられた。それに対して、今の若い人は死を強制されることがないのでうらやましい。」

もう一つ、「先の大戦ではたくさんの人が犠牲になった。お国のために戦うのが当たり前だったが、果たして戦争をすべきか否かなど考えなかった。それについて、今から振り返ると後ろめたい。」

この2つの感情、つまり、「うらやましき」と「後ろめたさ」。これがくだんの発言をもたらした。このような感情に基づく発言は、冗談の発言、自分の感情をはぐらかす発言なのであって「真剣な発言」ではない。だから、くだんの発言は、(議員ではなく一般人がいう限りでは) 許せる発言、理解できる発言なのだ。思えば、くだんの発言ほどひどくはないが、同趣旨の発言は、父もすることがよくあった。

対して、今回の自民の若手議員による「戦争肯定＝戦争反対批判」発言は、そら恐しい。なぜかという「真剣な発言」だからだ。(議員ではなく一般人で) 戦争で死ぬことも覚悟した年代の「戦争肯定＝戦争反対批判」発言は怖くない。しかし、戦争で死ぬことを覚悟したことのない(一般人ならともかくとして) 若手の議員が戦争肯定の言動をすることは恐しい。

今回の自民の若手議員は、戦争法案が成立し、集団的自衛権が発動されたとき、戦争反対運動が起こればいうかもしれない。真剣に。「戦争に反対するような、自分中心、極端な利己的考えを持つ連中は皆機関銃で撃つてしまえ。」

そして、これまでも治安出動が検討されたことがある※ことから、その発言内容は実行されてしまう危険がある。「真剣な発言」とは、その内容の現実化を迫る発言だから。

※治安出動の検討については、ウィキペディア<治安出動>をご参照(下記URLをクリックすればお読みいただけます)。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%BB%E5%AE%89%E5%87%BA%E5%8B%95>